

聖書箇所： ルカ15：11-24

- 12：弟が父に『おとうさん、私に財産の分け前をください。』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。(13)それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。
- 14：何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起り、彼は食べるものにも困り始めた。
- 15：それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。
- 16：彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。(17)しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大勢いるではないか。それなのに、私はここで、飢え死しそうだ。(18)立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対しても罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。」』
- 19：もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』
- 20：こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走りよって彼を抱き、口づけした。
- 21：息子は言った。『おとうさん。私は天に対しても罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』
- 22：ところが父親は、しもべたちに言った。「急いで一番よい着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。(11節、23～24節、省略)

メッセージ骨子：

<序論> イエス様は進んで収税人、遊女、病人たちと食事をしました。それを批判した宗教指導者たちに、イエス様は、私の思い、天の父の思いはこうなのだと、3つのたとえを話されました。小さなお話を2つ(100匹の羊、コインを探す女性)そして最後の締めくくりが、この放蕩息子のお話でした。

<ポイント1> 「罪の気づきを主の愛の問いかけと知る」

アダムとエバが、神が唯一禁止された、善悪の知識の木の実をとって食べたところから、原罪(original sin)は始まります(創世記3章)。神はそんな彼らに対して『あなたはどこにいるのか。なんということをしてくれたのか。』悲しみをもって問いかけます。これは責めの言葉ではなく、実は愛の言葉でした。『まだ間に合うよ。帰っておいで』と。十字架のメッセージは、神にとっての御子イエス様の価値が、そのまま私たちへの価値、両者は完全にイコールだということ。つまりイエスキリストに対する神の言葉『あなたは私の愛する子』(マタイ3：17)が、そのまま、今や私たちに対する愛の宣言なのです。だから悔い改めるに遅すぎる罪などありません。失敗しても、罪を犯しても、放蕩息子のように『遠い国』(13節)に行ってしまうことが大切です。

<ポイント2> 「とにかく帰ろうと思う」

自分の家は裕福で、自分は高貴な家の出だという、こんな単純なことに気づくまで、彼は長い年月を要しました。しかしそのあともまだ父の心は十分にはわかっておらず、『雇い人の一人にしてください』(19)と言おうとします。そうです。たとえ父のことはわからずとも、確信がなくとも帰ってくればよいのです。誰もあなたを止めません。そこは元々あなたのうちだからです。

<ポイント3> 「赦されていると知る」

「まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ」(20節)とありますが、父は偶然みつけたのではない。待って、待って、待ち続けて、とうとう息子を見つけた、そして走ってきたのです。実は、17節の「我に返った」とありますがこれがポイントでした。『俺は何をやっているんや』と気づいた。そのとき、なんのアクションを起こす前に『私の愛する子』の地位を、彼はすでに回復していました。あなたが帰ること、本来のあなたに戻る事が、神にとって最大の喜びなのです。

<まとめ> 『帰りなん、いざ。田園まさに荒れんなんとす。なんぞ帰らざる。』これは宋代の詩人、陶淵明の『帰去来の辞』の書き出しです。役人の地位を捨ててふるさとに帰る、晴れ晴れとした心を歌ったものです。しかし、私たちの場合、彼のように、仕事や住む場所を変える必要はなく『神のもとに帰りたい。帰ります。』もうそれだけで十分なのです。心の田園があれそう。だから帰ろうって。主は、十字架の血潮によって、我が家への帰りの切符を用意して下さったのです。

『これは私の愛する子。私はこれを喜ぶ』(マタイ3：17)

『そしてあなたは真理を知り、真理はあなたを自由にします。』(ヨハネ8：32) 以上